

地球連邦軍上層部はい  
つも多忙です。

haniwal7

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

キャラの濃い連中にいつも振り回される地球連邦軍上層部。地球圏の平和は彼らに委ねられているのだ！

# 目次

地球連邦軍上層部はいつも多忙です。

1

高官、第二の刺客

7



# 地球連邦軍上層部はいつも多忙です。

## 地球連邦軍最高司令部第1会議室

ここに地球連邦軍の上層部である最高司令部の高官達が、観艦式での大惨事の対応と対処を話し合っていた。将官だけでも大將2人、中將5人、少將12人、准將9人と錚々たる面子が雁首を揃えて憂鬱な表情をしていた。

ああ、また仕事が増える…と。

あかん、主戦派とコーウエンがやらかしやがった。極秘の核を強奪された挙句に使用され、ワイアットは戦死、観閲艦隊はほぼ全滅、コンペイトウ駐留艦隊は機能不全、宇宙軍は右往左往とは…。

「コリニー大將は何と?」

「こちらで対処する、と」

宇宙軍総司令官のコリニー大將は最高司令部の干渉を嫌うことで有名な人物だった。一年戦争が終結して最高司令部に指揮権がなくなっただけからはそれが更に顕著になっていった。

「情報局の情報は宇宙軍総司令部には流しているな?」

「コロニー落としを画策している件は伝えていますが、ソーラシステムで何とかかなると思ってる節がありますね」

情報局長の中将からの回答が更に暗澹たる思いを募らせた。今までの主戦派がやらかした尻拭いの経験から、今回も絶対に大惨事になるパターンだと…。

はあ…、これは手を打っておく必要があるな…。

「まあ、照射が成功したら何とかなる…が、あれは使い方が難しい。あれを突破されればどうにもならんし、先ずはソーラシステムを使わざる得なくなる前に事態を打開すべきだろうな」

「では？」

これは奴らを使うしかあるまいなあ…。

「ロンド・ベルを投入する。ロンド・ベルは最高司令部にのみ責任を負う。任務はコロニー落としの阻止とデラーズ・フリートの壊滅」

「了解しました。宇宙軍には何と？」

まあ、分かりきってるが、言うだけ言っとかんとな…。

「どうせ聞く耳持たんが、最高司令部も独自で動く。宇宙軍も事態の打開に最善を尽くすように、と伝えてくれ」

「了解」

あつ、そうだ。事の発端を作ったアホンだらはどうした。

「…ああ、あとコーウエン中将は？」

「アルビオンを動かして対処に当たっています」

はあ!? ペガサス級1隻だけだど!? あのマヌケは何考えてる!!

「第3地球軌道艦隊は？」

「第4軌道圏に展開中ですが、動きが鈍いですね」

「…どういふことだ？」

「コリニー大将の横槍が入っているようです」

また派閥争いかよ!? そんなもん平和なときにやれよ!!

「はあ…また派閥争いか…予算と心に余裕がある奴らが羨ましい…」

「ですね…」

心が折れそう…。

このとき、上層部高官の髪が一本、手元の珈琲に落ちた。上層部高官は抜け毛が珈琲に作つた波紋を見ながら、地球圏の行く末と自分の抜け毛対策に目を顰めるのだつた…。

ルナツー要塞ロンド・ベル駐留基地MS第3格納庫

「レイ少佐！最高司令部より命令です。」

「やはり来たか。上層部は我々をまた扱き使うつもりだな。」

アムロはいつもの無茶振りに苦笑いを浮かべた。

一年戦争が終わって連邦軍主戦派や高官に危険視され幽閉されそうになったときに後ろ盾になったのが、現在の地球連邦軍上層部だった。

旧ホワイトベーススクールで希望者は全員が新設のロンド・ベルへ編入され、アムロとブライトに至っては士官大学校に特別入学させられた。ここでは士官教育と指揮幕僚教育（ブライトは上級指揮幕僚課程も受講）、アムロは更に並行して高校と大学の普通教育も詰め込みで行われた。

1日16時間のカリキュラムには発狂しそうになったが、同じく大学校に入学したブライトが睡眠学習用バイザーとヘッドホンを付けられて、寝てる時も酷く魔されながら24時間教育課程を受講している姿を見ると、ああはなりたくない…と自分を慰めていたのは、今では良い思い出だ。

アムロの性格的にはまだまだ反発しそうなものだが、真っ白になりながら教育を受けるブライトや多忙からか目を真っ赤に充血させ、目の周りに真っ黒なクマを作ったパンダみたいな連邦軍上層部高官の激励を受けたら、ドン引きしてとても反発出来なかつ



た。

卒業後は史上最年少で少佐に昇進。各地のジオン残党軍の掃討作戦や動乱の鎮圧に従事した。中には衛星軌道上からアレックスだけで残党軍のど真ん中に降下させられて殲滅戦をやらされたこともあったが、あのときは上層部は自分を殺そうとしていると本気で悩んだりした。

しかし、その後、過重労働による過労で入院しつつ、病室で仕事をしている上層部高官から、無茶振りへの謝罪と感謝の言葉をテレビ電話で受けたときは、それはそれで嬉しかったのも事実だった。

色々と不満はあるものの、今自分がそれなりの地位でやっているのも上層部のお陰であるとの感謝もあり、無茶な命令にも反発はなかった。

「特に少佐をまた扱き使うつもりでしょうね。」

「言ってくれるな。それで?」

部下がおどけて報告してくるのを聞きながら、アムロはどんな無茶振りが降りかかるのかと部下に内容を聞いた。

「観艦式を襲撃したジオン残党軍、デラース・フリートの撃滅とコロニー落としの阻止とのことです。」

「コロニー落としだ?!」

ジオンはまたあの悲劇を繰り返す気か!?

「はい。コロニー落としに利用が予想される無人コロニーのリストはこちらに。」

一年戦争で損壊して無人化したコロニーは多いことは分かっていたが、これを全て捜索するのは厳しいな…。だが…。

「まずはコロニー落としの阻止が最優先だな。機材は？」

「全て投入可能です。少佐のアレックスはトロイホースに積み込み中、中隊全機も1600までに積み込み完了、1800には出撃可能です。グレイファントム隊も同様です。」

「ブライトは？」

「ブライト司令も艦に向かっています。1500よりブリーフィングです」

「了解した。」

これは急ぐ必要があるな。

アムロは新たな戦乱の発生と更なる大きな戦いを予期して目を細めた…。

## 高官、第二の刺客

地球連邦軍最高司令部第1会議室

今日も憂鬱な顔をしたいつもの面子が、いつものように地球連邦の未来を左右する重要な議題について話し合っていた。

さて、ロンド・ベルを動かしたはいいが…。

「ロンド・ベルを動かしたが、それだけでは不安だな」

「いつものように無双するのでは？」

他の将官から楽観的意見が出る。奴らの無双ぶりは空恐ろしいものがあるのは確かだが、連邦市民の命が掛かっているのだ。慎重に動くべきだろう。

「まあ、その可能性は高いが予防線は張るべきだろう」

上層部高官の意見に他の将官たちから愚痴が噴出した。

「宇宙軍総司令部もコロニーが落ちるのはジャブローだからと手を抜くかもしれんな」

「最高司令部がなくなれば、宇宙軍の目の上の瘤がなくなるからな」

「どんだけ最高司令部が嫌いなんだ」

「一年戦争で最高司令部が主導権を取りすぎたからだ。分かりきったことだろう」  
「うちはいつも内輪揉めばかりだな…」

本当に頭が痛い現実だ…。ここにいる面子は、誰も彼もが地球連邦軍の中では上澄みの中の上澄み、連邦軍総員500万人の頂点に立つ将官たちだ。

旧世紀時代。極東の国家で人気を博したドラマで、とある老警察官が言っていた。

「正しいことをしたければ、偉くなれ」と。

偉くなつた筈なんだけどなあ。

巨大組織の最高意思決定機関で待つていたのは、派閥争いと権力闘争、足の引つ張り合いをする軍人どもとの間に挟まれ、調整役を担う仕事だった。

正直、「ふざけるな」と言いたい。

だが、簡単に放棄出来る程、安い仕事ではないことも確かだ。

「諸君、無駄話もそれまでだ。我々の頭上にコロナーが落ちてくるかもしれない。そんなれば、我々だけではなく、南米の市民や地球環境にも甚大な被害が出る。それを許す訳にはいかんのだ。」

私の言葉に一気に会議室に緊張感が漲る。この会議室の面子は、不平不満はあれど、連邦軍人の本分は果たす者たちなのだ。

「その通りだ。何か案があるのかね？」

「ちよつとした知り合いが居てね。今はデラーズ・フリートに潜り込んで貰ってる。」

「ここで、私の秘策を提示する。彼女とは一年戦争時からの付き合いだから、もう出会つて4年になるか…。」

「ほう？旧ジオンの人間か。信用出来るのかね？」

「まあ、私としては信用はしている。とても気が強い人間だが、味方にしたら心強い。身内想いな良いやつではもある。」

「普段は非常に不穏な言動も多いが、部下たちの為にあちこち飛び回っている姿は、十分に尊敬に値する人物だ。」

「…巨大組織に胡坐をかいているバカな軍人どもに、その爪の垢でも煎じて飲ませたい程には。」

「君の知り合いか。君の目は信用しているよ。相変わらず抜け目なくやってるね。」

「人材は宝だよ。人脈は広げるべきだからね。取り敢えず、彼女に頑張つて貰うさ。」

「彼女」という言葉に居並ぶ将官たちの顔が渋くなる。

「女か。君、またやられるんじゃないか？私はもうフォローせんぞ。」

「いつも私のフォローをやってくれる将官が、顔を顰めながら突き放すように言ってくる。」

彼は昨年、仲介に入った際に引っぱたかれたことを根に持っているようだ。

セイラ嬢は何を怒っていたのか…。

あのおとき私は過労で倒れて入院していたんだから、むしろ被害者は私だったのだが…。

「何を言うのか。皆、一蓮托生だよ。何かあったら是非宥めるのは手伝ってくれよ。」

「君は女の扱いがヘタだからな…。まあ、取り敢えず健闘を祈るよ。」

諦めたようにいう将官たちを後目に、上層部高官はコロニー落としの阻止に向けて手を打っていく。

そう、すべては連邦市民の安寧の為なのだから。

最高司令部上層部高官執務室

上層部高官は、自分の執務室で極秘回線を開いていた。

多重暗号の高速通信で、量子コンピュータでも解読困難な最新の暗号プロトコルが導入されているものの、この通信回線を使用出来るのは、連邦軍でも極一部の高官のみだ。

おっ、ようやく繋がったようだな。彼女への通信は細心の注意が必要だから、今回は比較的繋がるのが早いほうかな。

「やあ、やっと話せるね。どうだい、そっちは？」

「ああ、コッチは景気よくやってるよ。あんたはどうなのさ？」

今日も彼女はご機嫌だな。一年戦争時代のような不機嫌そうな顔は最近めつきり見なくなつたし、色々と落ち着いたのかもしれんな。

「私は相変わらずさ。先週の間ドックも要精密検査の通知が着たよ」

「あんだ、私よりも先に戦死しそうだね。病院は行ったのかい？」

「いや、忙しくて中々…。って、それは良いんだよ。そっちはコロニー落とそうとしてるんだろ？どのコロニーを落とそうとしてるか分かるかな？」

「いかな。どうも最近、雑談ですぐに人間ドックの結果や健康管理面の話題が出てしまふ…。」

正直、同僚とも雑談の話題が、サプリや健康に良い食材の話ばかりだから…。妙齢の女性に話すことではない。

彼女も心配そうにしているし、話を本題に戻さないと…。

「サイド6の廃棄コロニーを使う予定さね。今のところは、83年の7月に動かす予定さ。陽動もやるけど、本命はこのコロニー落としで間違いないよ。」

「なるほど、サイド6か。ロンド・ベルを向かわせる。逃げるタイミングは任せるよ。ロンド・ベルの司令官には伝えておくから、上手く逃げてくれよ。」

さすが仕事においても的確で有能だ。ジオンもこんな人材を何故適切に使わなかったのか…。

「分かってるよ。それより、今回の報酬も大丈夫だろうね?」

「ああ、勿論。いつも通り、報酬は約束するよ。むしろ、私としてはそろそろ君たちを連邦軍に編入したいと考えているんだ。」

もう、戦争が終わって3年経っているし、旧ジオン将兵の一部も連邦軍に編入された人材も居る。頃合いだろう。

「…私たちを連邦軍に編入したら、またあんたの過労とストレスの原因になるんじゃないかい?」

「私としては、むしろ君たちを今のままで居させるほうが問題だと考えているよ。というか、出来れば今回の件が終われば、もう編入させたいと考えているんだ。」

「…はあ、私も年貢の納め時かもね。編入については部下に話しておくから、あんたの側で準備が出来たら教えてくれれば良いさ。」

おっ、編入の提案にあっさり乗ってくれたな。有難いが、もっと条件交渉があると思ってたんだが…。

「おや? 条件について交渉しないのかい?」

「ふん。勿論、その条件も事前に提示して貰うさ。ただ、あんたの事だから、悪いようにはしないとも思ってるよ。」

何だろう…、この信頼感…。私は彼女に結構無茶ぶりもしてきたんだが…。勿論、作



戦の安全性や報酬などは、しっかりと精査したが…。

「その信頼には是非応えさせて貰うとするよ。じゃあ、今回の任務、無理しない程度に宜しく頼むよ。」

「ああ、任せな。あんたの期待は裏切らないと誓ったんだ。期待してもらおうか」  
さて、これでデラーズ・フリート内部からも取り崩すことが出来るな。

…だが、やはり念は入れておかんとな…。

\*\*\*\*\*

コロニー落としを画策するデラーズ・フリート。

己の正義と武人の名誉を全うせんとする男達。

しかし、その正義と名誉の為に犠牲なる市民の何と多いことか。

最高司令部上層部高官たちも、連邦が正しい事をしてきたとは思っていないものの、無辜の市民が多数犠牲になることは許容出来なかった。

そして、一年戦争を避けられなかったという負い目もあった。

だからこそ、今回は絶対に犠牲は少なくする。

その為に動かす二本の矢。

ロンド・ベルとジオンの裏切り者たち。

最高司令部の実力部隊と内通者には手を打った。

しかし、連邦宇宙軍内部にも手は打っておくべきだろう。

「さてさて。彼にも念押ししておくかな。」

「やあ、大佐。そっちの作戦は順調かい？」

「うお!?!か、閣下!?!」

上層部高官の暗躍は続く。全ては連邦市民の安寧のために。